

君はサルになりたいか？

このテーマは、「君」にも「サル」にも失礼かもしれませんが、最近、言葉が不足しているなど感じる事がしばしばありますので、あえて挑戦的な表現をしてしまいました。

とある食堂での一コマです。食事をしながら一人の若者がいいました「チョーやばくねえ」。私は一瞬、それ程ひどくはないだろうと思っていましたが、彼らの会話を聞いていて、実は「この料理は、美味しいねえ」といっているのだと分かりました。

ゴルフの宮里選手や石川選手はインタビューでも良くしゃべりますし、また、聞いていて非常に分かりやすく、意志の強さも感じます。こういう若者がいる一方、「ウゼエ」「びみょー」、はたまた「アリっぼくねえ」といった幼児語で済ませてしまっている若者も多くいます。

言葉遣いは、時代と共に変化していくものではありませんが、幼児語の氾濫が深刻なのは、言葉の乱れということに止まらず、言葉足らずという問題を内包していることです。

人間関係が、極限られた仲間内だけに限られるのであればとやかく申しませんが、言葉足らずのままでは、他者とのコミュニケーションを十分に取ることができず、結果、社会の中で活動していくことにも障害が生じてしまいます。語彙が貧弱で表現能力が拙いことは、不幸の中でもグレードが高い（春日武彦著「不幸になりたがる人たち」）という指摘は、その通りだと思います。

相手の考えていることを、表情や態度だけで正確に理解することなど不可能なことです。人と人がコミュニケーションを取る時は、ハッキリと言葉か文字にして自分の意志を相手に伝えなければなりません。伝えるすべを持たずに社会生活をするというのは、口は悪いですが、人間のお面を被ったサルに等しいといわざるを得ません。同じ仲間内で群れている内は良いですが、言葉足らずのままでは、群れから離れてしまうと孤立して、自立できないのではと心配になります。

もう一つの心配は、言葉が足りないうえに、伝えるべき「思い」自体も貧困になっていはいないかということです。例えば、「かなしい」という言葉一つ取っても、「悲しい」「哀しい」「愛しい」と使い分ける表現方法を知れば、自分の心の中にも使い

分けるだけの「心のひだ」があることに気付くでしょう。そうでなければ、「かなしい」気持ちもまた、のっぺらぼうとしたものに過ぎません。

専修大学法学部教授の岡田先生によると、

「感情は、実在的に存在するわけではない」「言葉が気持ちを作る」のだと述べています（岡田憲治著「言葉が足りないとサルになる」）。また、学校教育では「言語表現を豊かにするためのプロセスが逆になっている」とも指摘しています。

学校では、「思いを文章にしてみよう」といった指導が行われていると思いますが、表現する言葉が育っていなければ、大工道具なしに家を建てるようなもので、自分の中に潜む「思い」を深く洞察することも、また、それを心の中から引き出すことも難しいでしょう。

豊かな言葉の海に生きてこそ、人生もまた豊かで楽しいものになることを、子ども達には分かって欲しい。その為にも、学校教育において、言語力がしっかりと身に付くよう指導していただくことが重要だと思っています。（塾頭 吉田 洋一）